

繁殖

鳥が一羽、腹を昼の海のように瞬かせ、雲ひとつない青空を旋回する。このあたりだけで見ることができるとそれは、僕が知るなかでは一番自然に近い動きをしている。

あれは正しくは鳥類型監視システムで、このセキュリティタウンの番人だ。

「この町も人が増えました。少しずつ復興が進んでいます」

白地に小さな赤い模様をつけたティーカップに骨ばった長い指を添え、お茶を注ぎながら華先生は言う。

「あの鳥も、もっと自然に近づけるといいのだけど。まだそこまで技術が追いつきません」

「今もずいぶん精巧に見えるけど。先生の理想はどこですか」

僕は職業病のようなもので興味がなくても話を続けさせてしまおう。

先生は知り合った頃より随分皺の増えた首をひねり、高いガラス天井から空を見上げ、

「そうね、たとえばあれが、自律的に繁殖するくらい」

と答えた。僕は「なるほど」と相槌を打ち、お茶を腹に入れる。復興に一役買った学者の考えは僕にはわからない。機械が繁殖するとはどういうことだ。

「人間は無性交生殖に至ったんだから、できるんじゃないですか」

適当に言うともたまたまお茶を腹に流し込む。先生の入れるお茶はいつも適温で品の良い味がする。高級住宅地に住むお人は僕らとお茶の入れ方も違うのだろう。何しろ「繁殖」の仕方も違うのだ。

「いろいろ言われていますが、私は幸福な時代になったと思っています。生命のつなぎ方が多様になりました。キラさんにも感謝しているんですよ」

微笑みながら電子卓を挟んだ向かいの椅子に掛けて、モニターをONにする。モニターには風に波打つ青々とした草むらが広がる。その中を二つの人影が、草の海にうねりを立たせている。ズームすると、草むらに浮いたり沈んだりしている黒い頭は「まゆりん」だ。もうひとつは胸から上を緑に浮かべて、まゆりんの少しあとを移動している小麦色の肌の少年、草平だ。まだ七つのまゆりと五つ年長の草平が同じ速度で動けるわけもなく、追いかけてこの様相を呈しているが、時たま後ろを振り返りながら必死に走るのはまゆりんだけで、草平はわざとらしく腕をばたつかせて一定の距離を保っている。広角に切り替えると、少し離れた木陰のベンチで汗をふきながら水筒を口に付けている肥った男が見える。トンちゃんだ。枝や草に遮られてはいるが、丸い肩や顎と境のない首、重力に逆らうことなく広がるでっぷりとした下肢が見える。

「遠地さんがああして子守してくださるので、助かります」

華先生はトンちゃんを正しく遠地さんと呼ぶ。最初トンちゃんをここに連れてきたときは、年の近い彼女がトンちゃんを好きになってしまうのではないかと不安になったが、どうやら杞憂だったと今では知っている。彼女は本当に、嘘じゃなく、異性に興味がないのだろう。

モニターの中のまゆりんの黒い頭は少しずつ速度が落ちていく。疲れたのだろう。風に揺れる花びらのように頭を揺らし、止まりかけたところを後ろから草平が脇をつかみ持ち上げる。持ち上げたままその細い腕でまゆりんを肩に乗せる。まゆりんはもつと細い腕を草平の首にまわす。鳥は音声を拾わないが、髪の毛のあちこちに葉っぱをつけたまゆりんの顔を見れば、あのけたたましい笑い声をたてているのだろうと想像がつく。

鳥に気づいたらしい草平が空を見上げて手を振る。途端、バランスを崩しそうになり、まゆりんが草平のおでこをつかむ。慌ててやってきたらしいトンちゃんが、緑色の海に黒い大蛇のような道を作りながら草平に近づき、ままゆりんを引き受けると頬ずりをして、肩車だ。

「ひどい溺愛だ」

思わず顔をしかめて華先生の様子を伺うと、先生は眉間に皺を寄せて困惑していた。

「ごめんなさい。草平が危ない遊び方をして遠地さんに心配をかけました」

学者先生が何を恐れるのかいまいちわからなかった。

「子どもは危ない遊び方をするって研修で学びました。気にしないでください」

それよりも僕はあんまりにトンちゃんが「娘」に執着していることに腹が立つ。まゆりんを我が家に迎えてからというもの、恋人の時間が減り欲求不満でもある。

息を弾ませ下り坂を転がるように走り込んできたまゆりんの黒い髪の毛に手を置いて、「おかえり」と声をかける。トンちゃんから親子の交流にはスキンシップが大事だと言いつけられている。研修でも習った。子どもは得意ではないが僕なりに努力している。

「ただいま」

必要以上に大きな声を屋内テラスに響かせてからまゆりんはまた走り出す。どこで転んだのか服が泥だらけだ。後から来た草平も泥だらけのまま「ただいまマンボ」と言い、まゆりんを追って走り出す。

「草平、室内ではやめなさい。障害物があるのだから危険です」

先生がたしなめると草平は「ごメンソール」と舌を出す。どこかで取り違えられて

僕の遺伝子は彼に配分されなかったのではないかと思うほど快活だ。

「まゆりん、お風呂に入りましょう。泥だらけです」

腰を屈めまゆりんの目の高さにあわせて華先生が言うのと、急に恥ずかしくなったらしいまゆりんは僕の後ろにかくれ「草平も泥だらけだよ」と言う。草平は「オレは自分で入る、行ってきます」と言うのでシャワー室に走っていく。

「草平、走るのをおやめなさい」

もう一度華先生が言うが届かない。

草平がシャワー室に行ったのを見るとまゆりんが「まゆりんも入る」と言うや否やブラウスのボタンを外し始めた。子どもはみんなそうだと言うが、まゆりんは特にわがままに思える。こうと言い出したらきかない。

華先生が慌てて「まゆりん、いけません。服は脱衣所で脱ぎましょう」と言うが、脱衣所なんてご大層な場所は我が家にないたため「だつじよって何」とまゆりんはだしなく口を開ける。

「うちはバストイレです」

失笑して告げると先生はさつと顔を赤らめ「ごめんなさい。ねえ、まゆりん。ここでお洋服を脱ぐのはやめましょう」と言い換える。聞こえないふりをしてボタンをも

たまた外すまゆりんの手を先生は取り、ボタンをかけ始める。ああ、と思った時には大抵遅いのだ。

「やだ！」

まゆりんは先生を突き飛ばした。先生は尻餅をつく。若くないしトンちゃん違ってクッションとなる肉も少ないので心配になって「大丈夫ですか」と声をかける。

「やだ！ここ！脱ぐ！お風呂！」

先生を突き飛ばすだけではおさまらなかったのか、まゆりんはブラウスのボタンを全部ひきちぎってしまった。こうなったまゆりんはトンちゃんじゃなきゃどうにもならないが、トンちゃんはどこかで休憩しているのかまだ戻ってこない。

まゆりんはのけぞって床に転がり、きいきいと喚きながら足をバタバタさせ始めた。「やめろよまゆりん」トンちゃんから怒鳴っちゃいけないと言われてるので僕は怒鳴りつきたい気持ちを抑えて言う。だが怒鳴りもしないでどうやってこの野生動物をなだめることができるのだ。

華先生を見ると狼狽するばかりである。僕の遺伝子はこういう悪さはしなかったと見えて状況に慣れていないようだ。勿論、養親研修でも言われ世間でも言われているけれど、性格は遺伝より生育環境の影響が大きい。だが僕は、まゆりんのかんしゃく

を見るたびに、生後三ヶ月のまゆりんを駅のゴミ箱に捨てたという女のことを思う。

息のあがったトンちゃんが汗を拭き拭きやってきて驚いたのは言うまでもない。最愛の娘が全裸になって（その頃には下着も脱いでしまっていた）泣きながら暴れているのだ。

「どうしたのキラ、何があったの」

犯人を見つけた次第殺しかねない剣幕でトンちゃんが怒鳴りつける。普段温厚なトンちゃんはまゆりんのことになると人が変わってしまう。引き取った頃より今の方がだいぶ酷い。よせばいいのに先生が「ごめんなさい遠地さん、私が余計なことをしました」と頭を下げるのでトンちゃんも「僕たちの家のことは口出ししないでいただき」と大声をあげ、ぎゃーと泣くまゆりんを抱き寄せる。まゆりんはトンちゃんが目に入らないのか足をばたばた動かしてトンちゃんの腹にキックするが、トンちゃんは意に介さず、あるいは脂肪がクッションになるから事実気にならないのか、「大丈夫だよ、大丈夫」と抱きしめる。その大きな腕は四年前まで僕のためだったのだという思いが僕の中にむくむくと沸き上がり

「いつものことだよ、先生は悪くないよ」

と悪態をついてしまう。

「まゆりんがいやがること、キラはわかるのに何で先生に教えないの」

腕の肉も腹の肉も顎の肉も揺らしてトンちゃんが声を荒げる。いつの間にかシャワーを終えた草平が僕と同じ色の額に滴を垂らして立っていた。

僕は場を考えないトンちゃんにも、おろおろするだけの先生にもイライラして、ついで

「仕方ないだろう、僕は子どもが嫌いなんだから。子どもを欲しがったのはトンちゃんだ。僕の子どもじゃない」

次の瞬間に平手打ちを頬にくらった。トンちゃんかと思ったが、目の前にいたのは草平だった。

「そういうことまゆりんの前で言うなよ」

たたいてごめんなさい、とこげ茶の髪の毛から滴を飛ばしながら頭を下げると、音の大きい旧式のドライヤーの電源を入れ、乾かすほどもない長さの髪にあてる。

「そうだよ、草平くんの言うとおりだよ、キラ」

そういうトンちゃんはいつもの穏やかな口調になっている。トンちゃんはまゆりんをぎゅうと抱くと「ごめんなまゆりん。大丈夫だよ、キラはまゆりん愛してるよ、トンちゃんもまゆりん愛してるよ」と告げる。するとそれまで呼吸が止まるのではとい

うほど騒いでいたまゆりんは急に静かになって「まゆりんトンちゃんとお風呂行く」とシャワー室に歩いて行った。

(2)

平成の終わり頃から始まった天変と地変と政変でこの国は大きく様変わりした。地凶も昔と今では少し違う。僕はいわゆる「以降」の生まれなので詳しいことは知らない。たとえば昔、結婚は男女の間にか許されなかったという。今では結婚しているカップルの三分の一が同性同士だし、結婚していない人は結婚している人と同じくらいいる。女性の胎内を経ない出産が富裕層に流行りだしたのはこの数年の話だが、養子制度はもつと以前に規制緩和されている。もちろん、一度でも虐待を行えばすぐに養親の資格は剥奪されて再取得することはできないし、虐待の基準はとても厳しい。結婚して二年した頃トンちゃんが子どもが欲しいと言い始め、三ヶ月の養親研修を受けて、「そろそろ社会化できると思うから」と言われたまゆりんを引き取った。それからのことは先に述べた通りだが、世のカップルの殆どが自分の性欲を諦めて子どもを優先するのだろうかと思うと皆聖人君子に思えてくる。僕はいつまで経ってもトンちゃんへの欲情が消えないし、トンちゃんを奪ったまゆりんが憎らしく思える時もある。

る。僕は研修を受けるまで知らなかったけど、性行為を見せることも虐待に当たらしい。いつでもすぐに恋をして僕が眠るのと同じ布団で恋人と愛し合っていた僕の母親は虐待をしていたということだ。

「今日は怒鳴ってごめんね」

後部座席のチャイルドシートで眠りこけるまゆりんの黒髪を撫でてトンちゃんはぼそりと言う。

「僕こそ」

僕はアイモニターを装着したまま後ろを振り返る。通常走行は車がやってくれる。僕はこのモニターをつけて、予測外の障害物が道路上に現れたときに停止ボタンを押せばよかった。

座席をまわしてトンちゃんと向かい合い、唇を重ねる。

「愛してる」

耳元で囁くと、トンちゃんはえくぼを作って「僕もだよ、キラ」と言う。僕は安心して、また座席を前に戻す。もし僕が一般の運転者であれば後ろを向いたままでもかまわないのだが、生憎僕の職業はタクシー屋だ。乗客運送業法は三分以上連続して前方から目を離すことを禁じている。AI家電の売れ行きが悪くトンちゃんのお給料が落

ちている今、家計を支えるのは僕だった。

「草平くんは、立派だね」

「好きになっちゃう？」

僕は意地悪なことを言った。

「なんでさ」

「だって草平の顔は僕と同じだし」

何せ彼は僕の精子と華先生の卵子を試験管で合わせてできたのだ。

「たしかに面立ちは似ているけど、草平くんはキラとは似てない」

「僕が立派じゃないってこと？」

どうしても意地悪になつてしまう。

「そんなこと言つてないよ」

トンちゃんはこういうときすぐ口ごもつてしまう。

たしかに今日の草平は立派だった。僕を批判したうえで、僕の遺伝子のおかげで顔がよくて助かっていると告げ、落ち込んでいた華先生にも「キラさんの精子を選んでくれてありがとう」と言っていた。僕がああの年頃に同じことをできただろうか。

「華先生の教育がいいんだよ、きつと。研修でも言つてたじゃない。親の遺伝子より

も生育環境が大事だって。僕はひどかったからね」

僕はそれが酷いと知らず、十五で先輩と同棲を始めるまで母と一緒に暮らしていた。恋人が変わるたびに土地を移る彼女について、あちらこちらへ行った。

「僕も良くはなかったから自信がない」

トンちゃんはまたぼそぼそと呟いて、まゆりんのぱんぱんのほっぺをつつく。まゆりんはむにやむにや言ったがすぐ口をだらしなく開け、鼻水と涎を垂らしながら眠っている。

トンちゃんのお父さんは先の戦争のきつかけとなったテロで犠牲になった。僕はその事件を教科書で読んで知っているし、トンちゃんによく似たおじさんの頭が銃でぶっ飛ぶ動画も見たことがある。その後お母さんは精神がおかしくなりトンちゃんは親戚に預けられたというので、きつと苦労が多かっただろう。親族が他人より残酷ということがあるのだ。

セキュリティタウンを出て一時間車を走らせると、ようやく我が家についた。でっかいオゾンホールにさらされる我が町東京。数十年後には青くなると言われる夕焼けはまだ赤く西の空を燃やしている。その東京の隅っこの築四十年の借家が僕たちの城だ。一階は車庫で、錆かけた鉄階段を昇った二階が居住エリアだ。車庫に車を入れる

と、僕はトンちゃんとキスをする。まゆりんを抱えたままのトンちゃんのキスはおざなりでまた僕は苛立つ。まゆりんをベッドに寝かしたらそのまま朝までトンちゃんを独り占めしてしまいましたかった。だが僕には仕事がある。背中を向けるトンちゃんの腹をさわると振り返らせ、また唇をせがんだ。

夕方からタクシーの稼ぎ時だった。僕はオペレーションモードをSalesに切り替え、行き先を「東東京総合病院」に指定する。外からは車体の側面に「空車 東東京総合病院行き」と文字が浮かんでいるはずだ。かつて大都市だったという東京は首都として登録が残っているが、国会議事堂も損傷が烈しく今ではただのサーバー室だ。議会はだいたい長野で開催される。大気汚染が進んだこの町は、セキュリティタウンのように空気をろ過する装置もなく、外出時にはマスクで自衛している。春になれば大陸から黄砂も放射能も飛んでくる。

しばらく走らせると老婆がマンションの前で手を上げていた。

「病院行きますね？」

はつきりした口調で背筋を伸ばして喋るが、顔から鎖骨に刻まれた皺を見るに、平成どころか昭和生まれかもしれない。僕は慎重に扉を開く。うっかりぶつけて転倒で

もされたらたまらない。

「何科に行きますか？」

老婆が乗り込んだのを確認すると僕は再び走行スイッチを入れる。

「産科まで。孫が子どもを生むのよ」

老婆の声は喜びでうわずった。

「へえ、手間が省けた。このあと産科でお迎えの予約が入っているんですよ」

「あらまあ、おめでたいことばかり」

そう言っただけで目をほころばせる老婆は、世で行われる出産という出産が全部めでたいことだと思っているのだろうか。

「東北でね、あったでしょう」

老婆は窓の外を見ながら唐突に話し始めた。

「事務所で林さんと電話しててね、出荷が遅れそうだって言うから何とか早めてくれて言っただら、ゆらゆらしたでしょう」

僕にとっては遠いおとぎ話で知る由もないが、「ええ、ええ」と相づちを打つ。

「林さんが、地震、地震って言って、またかけ直すって電話切ったけど、それっきりだったわね」

窓の外の赤い太陽を見ながら、表情も声色も変えずに老婆は話し続ける。

「こんなのもう起きませんようにって思っていたのに、あちこちでぐらぐらするし、それに戦争、そのたびにもうこりこりだ、人生辛いことばっかりだと思ってきたけど、こんなご褒美あるのねえ」

涙でも流すのかと思いきや、老婆は目を皺だらけの顔に埋めて笑った。

「あそこもだいぶ復興しましたね」

華先生の住むセキュリティタウンを思い浮かべながら声をかけたが老婆は聞いていない。

「孫もきちんと自然妊娠でね、ちゃんと自然分娩だっていうから、嬉しいわよねえ」

僕は、後から乗せる女ならこの老婆に何と云うだろうと想像して少しにやりとした。

その女は大体予約よりも遅れるのだ。老婆を降ろした僕は時間があるのを確認するとオペレーションをPrivateに切り替え、トンちゃんにフォンをする。鳥のさえずりが数回聞こえて、少しおさえたような「はい？」というトンちゃんの声が聞こえた。眠ったまゆりに気遣っているのだろうか、その囁きのような声は甘ったるく、僕はついつい反応してしまった。

「あーや、どうせ遅れるから、トンちゃんの声聞こうと思って」

「それでフェイスじゃなくてフォンなんだ」

うふふと笑うトンちゃんの声は少し息が上がっているようでもある。まゆりんのベッドで寝付かせていたのだろうか、まゆりんのものらしき寝息も聞こえる。僕がフェイスではなくフォンを使うのは通信料金の節約のためでもあるのだが、それは僕の胸にしまっておけばいい。それに実際、声だけを聞いてトンちゃんの表情をあれこれ想像することは好きだった。

「トンちゃんの声、好きだ」

息を吐きながら背もたれに体重を委ねると、まるでトンちゃんの肉厚な腹に体を埋めるような気分になって、その気になってしまった。僕のその気が伝わったのか、トンちゃんは少し呼吸を荒くした。

「キラ、会いたいよ」

トンちゃんの深いため息が聞こえた。僕は手を添えてトンちゃんあの白く大きな尻を思い浮かべた。

「愛してる」

呟くとトンちゃんは「僕もだよ」とすぐさま返した。

「トンちゃん、今、してるの？」

僕は手を止められず目を瞑って尋ねる。まぶたの裏に、白い耳たぶを赤くするトンちゃんがうかびあがる。トンちゃんは数回の息の後に「うん」とだけ言った。僕はもう十分だった。僕の体の先端に集まった遺伝子情報を捨てるように放出した。矢先、外の照明が明るくなった。産科の扉を開けて、ビニールコートにクリアマスクをつけた女が見える。

「ごめん、あーやが来たから、帰ってからね」と僕はフォンを切るが、その向こうでトンちゃんが果てたらしいのを感じて、帰ってからできるかなと心配になる。僕はすぐに精子を包んだペーパーをダストボックスに投げ入れると服を正し、消臭スプレーをまく。

「ごめんね、遅くなって」

車に乗り込んでクリアマスクを外したあーやはすぐに

「キラ、今してたでしょ、信じられない」

と目をつり上げる。小言を聞きながら僕は車を発進させる。あーやは僕が一度だけ間違っただけで妊娠させてしまった女で、性行為はしたくないけど妊娠は好きだと言って、試験官で受精させた細胞を子宮で育てる「子宮」部分を仕事にしている。

「今度の依頼主さん、夜型生活だから検診も夜にして欲しいっておっしゃるんだけど、そんなことで子どもの生活決まらないわよ」

あーやが送迎に僕の車を指名するのは、勝手知ったる何とやらで気軽にグチが言えるためだろう。僕の方でも、予約があーやだと思っていたからあんなことをした部分もある。

あーやが妊娠した時、あーやの両親に言われて結婚した僕らは父母教室に通った。あーやはそれが性に合っていたのか熱心に「育胎」に励んだ。僕の方ではため息しか出ない。「試しに一回」してみただけで出来てしまった赤ん坊など興味が湧かなかつた。でも捨てれば児童虐待で重年以上の刑になる。僕はあーやと別れる方法と虐待と言われず子どもと過ごしていく方法の両方を考えて頭がパンクしそうだった。赤ん坊を風呂に入れる方法などどうでもよかったが、その父母教室で、当時は今ほど多くなかった「代理懐胎」をあーやは知った。僕も「精子バンク」を知って登録をした。あのとそんなことをしなければ草平は生まれてこなかったし、生まれたとしても僕の遺伝子ではなかった。僕が面白半分に放出した遺伝子情報が、真空保存されて口座にお金が入る。当時はただ物珍しく面白かったのだ。

結局あーやは子どもが生まれるとすぐに手放した。生まれた子どもは病院が運営す

る養子縁組相談所に預けた。どこかのカップルにもらわれていったと代理人から聞いているが、たとえば死亡しても双方連絡をしないという契約を交わしたため、僕とあーやの遺伝子情報がどこでどうしているのか今となってはわからない。体が落ち着くとすぐに代理母派遣会社に登録したあーやはしばらくして独立し、毎年子どもを生んでいる。

(3)

かつて荒廃の象徴のように語られたその地区は、現在では人口二十万を越す一大セキュリティタウンだ。その中心の一等地に広い庭付きの居宅を構える華先生は間違いなくお金持ちだ。僕の精子を買い取り、若い頃採取したという冷凍卵子とかけあわせて草平を作った学者先生は、鳥を開発し、人工羊膜を作り上げ、タウンの設計をした時代の立役者だ。華先生が体外出産をした頃、まだ一人世帯が人工子宮で子どもをもつことに対する規制は厳しかった。今ではだいたいぶ利用者が増えたがそれでも高価だ。僕やトンちゃんがどこかで卵子を調達したとしても人工子宮をレンタルすることはできない。あーやがやっている代理懐胎にしたって客は富裕層だ。僕とトンちゃんには、やはり三ヶ月の研修を受けて施設でもらってくるしか子どもを持つ方法はなかった。

草平はそうして生まれた自分の特異さを知ってか知らずか、迷いなく太陽の光を受け取る若竹のようにすくすくと育っている。

二年前は草むらに胸まで埋めていたのに、今の草平は草むらに腰までしか埋めず僕と並べば目の高さが同じになった。

目の高さが同じになった草平は夏にサッカーの大会を控え、職能高校へ進学を希望しながら女の子と遊園地に行った話をするニキビ面の少年だった。

「障害は落ち着いたけど様子見のために今夜は現地だって」

と言いながら華先生と同じ手つきでお茶を注ぐ。基本的には年に一度、思春期に子どもが望むのならばそれ以上の面会が、僕が通常の精子提供以上の報酬をもらおう条件だった。若い頃は働かずに入金されるのであればと契約を結んだが、それがこんなに苦痛をもたらすとは思いもしなかった。本来であれば捨てられるはずだった僕の遺伝子情報が、僕自身が生きてきたのと全く違う環境で育ち、僕がつけてこなかった筋肉をつけ、僕と異なる性別を好きになり、僕にはない笑顔をする。あまつさえただ精子を提供しただけの僕に「キラさんの容姿のおかげで彼女できました」と明るく報告し、感謝のしるしと言って手料理をふるまう。

僕は哀れな遺伝子情報を引き継いだらしいまゆりんのことを考えた。トンちゃんが

どんどん食べさせるので栄養過多で豚のようになってるし、成長につれてはつきりしてきたが彼女の顔のパーツはちよつとずつ配置がおかしい。それでいて表情も大体暗い。一言で言えばブスなのだ。

性格は遺伝子情報ではなく環境だが、容姿は残酷なまでに遺伝子だった。

「公募はいつになるの？」

僕は新開発のセキュリティタウンのことを尋ねた。今日の早朝に障害連絡があり華先生は僕の対応を草平に一任し出て行ったのだそう。草平は肩胛骨を寄せてから広げ「知りませえん」とおどける。

「そりゃそうか」

草平がそれを知っていたところで、政府のトップシークレットだ。汚染された土地をセキュリティタウンとして売り出すのがいつになるのか、どの程度除染が進んでいるのか。だが華先生が現地に対応に出たということは試験運用が始まっているということ、恐らくここ数年のうちだろう。もちろん、僕にもトンちゃんにも縁のない話だ。

草平はお茶を飲みながらひとしきり恋人のことを話し、「今日まゆりん来なくて良かった」と前置きしてから、何回目のデートでキスをしたらいいかと尋ねてきた。僕は

大体デートをする前にキスをしているのでわからないと正直に答えた。草平の悩みはなるほど確かに、全く男性を知らない華先生には答えられないことだし、まゆりんがいたら幼さに遠慮して口憚ることばかりだった。二年前まゆりと一緒に走っていた少年は、今、まったく違う生き物になっていた。彼の生活には変化と驚きばかりが詰まっている。

帰る準備を始めると、草平は「忘れてた」と慌てて紙袋を引っ張りだし、修学旅行のおみやげだと言って手渡してくる。

「キラさんたちにはお菓子。まゆりにリップクリーム。京都行ったんだけど、まゆりに何あげたらいいのかわからなくて、彼女に相談した」

「ふうん、で、彼女には何あげたの」

「髪飾り」

目を細めて肩をすくめて少し笑うのは僕ではない、華先生の恥じらい方だなと思う。今度はまゆりんも連れて来てよ、と草平は小さく手を振った。車を発進させてしばらく経って振り返るとまだ手を振っていた。僕はそのとき彼を友人のように思った。

帰る途中三人客を拾ったので予定よりも遅くなった。トンちゃんはもうシャワーを

済ませていて、せっけんのいい香りがした。

「草平から、まゆりんにおみやげだつて。またみんなで来いってさ」

僕は「髪飾り」と答えた草平の、まったく血のつながらない他人のように見えた様子が暖かく思い起こされ、おみやげのことから話をした。もつとも、正しくは草平は「まゆりん連れて来てよ」と言ったのであつて、そこにトンちゃんは含まれていないのだが、トンちゃん抜きでまゆりんを連れてゆくことはありえなかつた。

紙袋の中にある小さな箱を開けて、トンちゃんは表情を曇らせた。

「草平くんて児童性愛者じゃないのか」

僕は驚いた。

「リップクリームなんて、まゆりんを女として意識してるってことだろう」

乾燥でよく唇の皮がむけるまゆりんにはリップクリームを買わなければと思つていたところだつたので、結果的に家計の助けにもなつてい

「妹みたいに思つてるだけだろう。同級生の恋人だつてい

る。そんな犯罪者いるわけない」

笑つて背中から豊かな腹に手をまわしたがトンちゃんは身を固くした。まゆりんはトンちゃんかと思うほど魅力的な子どもではないと、どうしたらわかつてもらえるのか。

「カモフラージュしてことでもあるじゃないか」

トンちゃんは声を震わせる。

「何のために。トンちゃん、それより」

僕は手を這わせたが振り切られてしまった。近頃こんなことが多い。僕が老いて魅力が落ちてしまったせいも多分にあるだろう。かといって僕の欲求はちつとも落ちないのだ。

「児童性愛は犯罪だから、同じ年頃の恋人を作って目くらましをしてるんだ」

僕は二度驚いた。トンちゃんが去年からまゆりんを連れて行くのを嫌がりだしたのはそんな理由があったのかと知る。思い当たるのは、あのときまゆりんが全裸になって暴れたことだ。親心に心配だったのだろう。僕は草平から受けた相談を明かしてやる。恋人とキスがしたい、できればそれ以上のこともしたい。そう思っただけでしてしまおう、勉強は進まないしママに知られたら恥ずかしい。

「健全すぎる、絵に描いたみたいで嘘っぽい。他人があんなにべたべた子どもを触るか？」

トンちゃんは聞く耳を持たず、寝室に行ってしまう。僕はもう一度布団の中で誘ってみたが「まゆりんが起きてたらどうするんだ」と怒ってそっぽを向いてしまった。

起きていたとしても、襖一枚隔てているのだから抑えてすればいいのだ。何より以前はしてくれたことを思うと、自分の肉体に訪れた老いが悔しいし、見せるだけでも虐待だとする法律が疎ましいし、頼りない間取りの借家にしか住めない自分の収入が恨めしい。僕はわざとトンちゃんにわかるように一人でしてみせるがトンちゃんは石鹸の香りばかりさせて寝息をたてている。僕は遺伝子情報をぶちまけて捨てる。

明くる朝、まゆりんはいつも以上に眠たそうにして子ども部屋から出てきた。朝ごはんを食べるとすぐにトイレで吐いた。熱があつた。風邪らしい。トンちゃんが病院に連れて行けと言うかと思つて車を出す準備をしていたがトンちゃんは背中をなでさすつて「大丈夫だよ、大丈夫だよ」と声をかけるだけだった。僕は車を出さずにすむことに安堵しもう一度寝室に戻った。次に目覚めると昼過ぎだった。トンちゃんはもう会社に行つてしまつている。甲高い声があるので居間に行くと学校を休んだらしいまゆりんがアニメの録画を見て真似をしている。もう九つになるのに子どもっぽい遊び方をするのはトンちゃんが甘やかすせいだろう。

あくびをかみ殺しながら

「おかゆでいいか」

と尋ねる。まゆりんは僕のことを好きではないらしく、一瞬背中をふるわせてから「いい」と答える。何がいいのかわからないが肯定だととらえる。

おかゆは水で量をごまかせて節約になるし、手間もかからない。いつも風邪を引いていれば唐揚げとか手間と金のかかる料理ではなくおかゆで済むな、と考えた。

ぐしゅん、ぐしゅんとくしゃみが続いて、ズツと鼻をすする音が聞こえる。また居間を覗けば寝間着の袖に豚のような鼻をこすりつけていた。

「ペーパー使えよ」

「ペーパーない」

探もしないで答える。トンちゃんがまゆりんをお姫様扱いして何でもやってあげるからいけないのだ。

「探せよ」

先週三人で買い物に行つてペーパーも買ってきたのだから、あるに決まっている。僕だって昨夜使った。

まゆりんは動画を停止させるとイスからどすんと降りる。並の子より背も高いし太っている。顔の配置は乱れているしこの子にいずれ訪れるだろう思春期を考えるとかわいそうになった。

まゆりんは物置のある車庫まで行かず、僕とトンちゃんの寝室に続く扉を開けた。面倒くさがりなのだ。これは環境だろうか、遺伝子だろうか。環境にも思い当たる節がある。

「あつた」

ぶーん、と鼻をかむ音が聞こえる。ここ数年紙の値上がりはひどく、僕が子どももの頃使っていた「ティッシュペーパー」は高級品になった。今量販店で手に入るのは「ペーパー」と呼ばれる粗悪な素材で、肌がいたむのだが仕方あるまい。まゆりんも「いたあい」と言ってから、キッチンにうつむいて入ってきて

「キラ、これ何？」

と片手を差し出した。その手には僕が昨日用意して使わなかったコンドームの箱がある。性行為を見せるだけでも虐待になる、と考えて一瞬肝が冷えたが、見せたわけではないと思ひ直した。トンちゃんを奪ったまゆりに意地悪したい気持ちもあった。

「恋人同士が愛し合う時に使うものだ。僕とトンちゃんも使っている」
ここ最近はめっきり使っていないが。

「ふうん」

まゆりんはその一つを取り出して開けようとする。

「子どもにはまだ必要ない」

僕はまゆりんの手から箱を奪い取る。まゆりんは鼻水をズツズツとすすりながらしばらくキッチンと居間を行き来していたが、おかゆのできあがる頃キッチンにまたやってくる。「さっきのあれ、使わないで愛し合うことできるの」と尋ねる。「まさか」と頭をよぎったが、何が「まさか」なのかわからない。まゆりんは叱られた時に調子狂いの質問をしてはぐらかそうとすることがあるので、きつとそれだなと思った。

「僕が病気の時にあれを使わなければトンちゃんに病気がうつる可能性がある。うつらない病気もあるけど、気がついていないだけってこともあるから使ったほうが安全だ」

内側についている薬剤は殺精子作用もある。僕の遺伝子情報を殺すこともできる。「それから男と女の恋人同士の場合は、妊娠を防ぐこともできる。望まない赤ん坊が生まれなくていい」

僕とあーやは無知だったため望まない赤ん坊を作り出してしまった。これだけ科学が発展してなお、妊娠を防ぐには精子をとじこめて殺してしまうのが一番確実なのだ。「ふうん」

「わかったらこれは僕とトンちゃんの部屋に戻して来い。それからペーパーは車庫に

あるから取ってこい」

すぐに立ち上がった外に出ようとするので「おかゆを食べ終わってから」と言うところりと向きを変えて席につく。

まゆりんがふざけて米をとぼしたり、唾を口にためてみせたり、最後にはまた嘔吐をして処理に時間がかかったので仕事に出るのが遅くなった。天気予報では深夜に雷雨になるといふ。悪天候の日にはわざわざ出かける物好きはおらず、いてもタクシーに乗る金がないような連中だ。念のためあーやに連絡して病院に行く予定がないか尋ねたが、出産直後で気が立っていたのかひどく怒鳴られてフォンを切った。しばらく車を走らせて二組客を拾った。そのうちの一人が長距離だったので儲けたが、雨音が強くなり雷鳴が近づくにつれ人は減る。車でさえ、走っているのはタクシーとバスだけだった。二十四時間ストアに立ち寄ると、たまに見かける初老の同業者が諦め顔で縁石に腰掛けている。

「もうだめでしょうかね」

話しかけると、男は「だめだろうねえ」としゃがれた声で答え、禁制となっている煙草を胸ポケットから出すと煙を吐いた。

僕は奮発してビールを買う。いつもより二時間は早く帰れる。トンちゃんがまだ起

きていたら一緒に飲んで、まずは話し合おう。もしうまくいけばその先へと考える。

車庫に入った時、川向こうの雑木林に落雷したのか大きな音が響いた。車庫の鍵を閉め、足を滑らせないように鉄階段を慎重に上る。僕はその夜、なぜか非常に神経質になっていた。玄関を開けるのもいつもより静かだった。扉を開けた瞬間、またバリバリバリ、という音が聞こえた。今夜の雷はよく落ちる。玄関を閉めると急に静寂が広がって、その静寂が小さな衣擦れを、軋みを、聞きなれた甘やかな声を、しくしくしくと泣く声を隠さなかった。

僕は音をたてないように廊下を歩いた。まゆりんが雷を恐れて泣いて、トンちゃんが「大丈夫大丈夫」と慰めているのだろう。それに違いないと思った。けれどなぜか僕は、息を殺して、気取られることのないように、まず居間の扉を開けた。片づけられていない皿と、僕のために残されたらしいおかずが暗がりには浮かんた。そつと扉をしめて、僕とトンちゃんの寝室の扉を開ける。そこには誰もいない。布団がひとつだけ敷いてあるが、そこに人が眠っていたようなぬくもりはない。僕は子ども部屋と僕らの寝室を隔てる襖の前に立って耳をそばだてた。トンちゃんは優しいから、子どもを大事にしているから、雷が怖いと泣くまゆりんを一人にはしないのだろう。

僕が襖を開けて灯を点けると、ベッドの上のトンちゃんは白い尻を少し浮かせて目

を見張り、それから

「親子だからさ」

と笑った。ベッドの下に散らばっているのは今日の昼間まゆりんが持ち出した箱の中身だ。白い灯りに照らし出されたまゆりんの足に赤く滴るものを見て、僕は、初潮のことはわからないから華先生に聞いてみようとしてフォンを手にしていた。

(4)

鳥が二羽、腹を瞬かせて青空を旋回している。その下に広がる草の海を、白いワンピースを着た若い女がゆっくりと歩いている。黒い髪の毛が光を受けて白く艶やかな輪を描き、栄養状態は十分よいのだと知る。その腹は大きく膨らんではちきれそうだ。立ち止まって腹をさすりながら女は振り返る。鳥の視界にもう一人女が入ってきた。二年ぶりに見るその女は栗色の髪の毛に古めかしい飾りをつけ、胸には同じ髪色の赤ん坊を抱いている。黒髪の女が栗色の髪の毛の女に何やら話しかけ、二人で空を見上げて手をふり、またゆっくり歩き始める。まもなく彼女たちはこの屋内テラスにやってくるだろう。

時間をかけて抽出されたコーヒーが酸味をたたせて薫る。来客用に常備されている

らしい焼き菓子を皿に広げて、精悍な顔つきの若い男は電子卓を挟んだ向かいのイスに座る。

折り目が正しくつけられた薄手のシャツの胸には地位と学位を表すバッジがいくつも光っている。

「新タウンの鳥は音声も拾うそうですが、この鳥はまだ古くて」

草平は長い足を組んで背筋を伸ばしたままコーヒーカップに口をつけた。

「繁殖はできますか」

僕は尋ねる。

「繁殖？鳥にその機能を備えても仕方ないでしょう。母は検討していたようですが」眉尻を下げて、小さい子どもを見るみたいに笑う。実際現在の草平にとって僕は小さい子どもと同じようなものなのだろう。

「先日視察してきたけれど、いい所でした。かなり遅れましたがあそこも復興に向かっていきますね。日本海が一望できる場所が霊園になるそうなので、遠地さんの名前で予約してきました」

僕は近頃丸くなってきた背をもっと丸くして「ありがとうございます」と頭を下げた。

十二年が経っていた。

フォン越しの物音で異変を察した華先生がすぐに通報し、まゆりんは保護され、僕とトンちゃんは養親の権利を剥奪されて実刑を受けた。まゆりんは五つの時には既にトンちゃんによる「接触」を受けていたのだという。弁護士から事情を聞きトンちゃんもかわいそうだと思ったが、かわいそうな身の上であることは犯罪を正当化しないのだ。虐待に気がつかないこともまた虐待なので、僕は半年の禁錮と三年間に渡る精神指導を受けた。トンちゃんは十五年の懲役となったが、期が明けるのを待たずに先日病死した。僕はあの日以来ついにトンちゃんに会えなかった。知らせを受けて遺骨の引き受けを申し出たが、死によって刑が軽減されたわけではなく、草平が見つけてきた墓に入れることができるのは三年後となる。

まゆりんを引き取り育ててくれた華先生は、以前から悪かった心臓が原因で二年前に亡くなった。長く中断していた草平との面会が復活したのはその葬儀がきっかけだった。

「妻を迎えた時は心配しましたが、まゆりと妻は仲良くやっています」

余裕のある表情で微笑む草平の隣に僕が立って、この男は僕の遺伝子で生まれたんだと主張したとしても、今では誰も信じないだろう。草平はあまりに立派になり、僕

は年齢以上にみすぼらしかった。

「子どもはいつ？」

「去年。母に見せたかったです」

わかりきっていたが念のため「自然妊娠で？」と聞くと「自然妊娠です」と白い歯を見せた。

一時期富裕層で流行った代理懐胎と人工子宮による育胎は五年前の規制をきっかけに激減した。減ったというより闇のものになった。あーやも体力の限界で廃業したと聞いているが実際どうだかわかったものではない。良識ある富裕層は自然妊娠と自然分娩を望み、大昔になくなった産婆という仕事が最近復活したという。

僕はためらいながら

「まゆりんの、あのお腹は」

と尋ねる。華先生が残り草平が手を加えたこの屋敷には、四人以外居住の形跡がない。

「無性交妊娠です。父親は僕です」

まっすぐこちらを見たまま答えると、草平はまたコーヒを飲んだ。

「まゆりんが僕の精子で子どもを生みたいと望んだ時、妻も僕も戸惑いました。が、

話し合いを重ねた結果こうなりました」

「そうか」

それ以外の言葉は出なかった。

「びっくりした？」

不意に子どもじみた砕けた言葉になった。

「まあね」

草平は背を反らせ伸びをすると立ち上がって、別に用意しておいた飲み物を二つのグラスに注いだ。

「でも、こうして生命がつながれていくのなら、いいと思いませんか」

言葉は出てこなかった。

外気にあわせて合成された風は草むらに波を立たせる。ゆるやかな下り坂を女が二人笑いあいながら歩く。頬をすりあわせ、軽やかに口づけをかわして。

栗色の髪の毛の赤ん坊が泣き出すと、相変わらず乱れた顔の配置をした黒髪の女が何か話しかける。赤ん坊が笑う。それからすぐに自分のふくらんだ腹を撫でさすり、つと上げた顔面に備わった非対称の二つの黒い目で僕を見留めて、口角を動かした。